
DRINK IT DOWN

natsuki,k

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D R I N K I T D O W N

【Nコード】

N 2 8 4 0 E

【作者名】

n a t s u k i , k

【あらすじ】

女子高生、優香の目の前に突然現れたのは全身黒づくめの大鎌を持った男だった

1 大鎌と長髪

あれ、やっぱり本物だよね…

最初に見て思ったのは、それだった
目の前の信じられない光景に、ただ啞然と立ち尽くす。

それは黒いスーツに黒いネクタイ、そしてサングラス。

それだけでも只者には見えないでたちに加え、トドメともいうべきアイテム

180センチはあるかという長身の男の背中には180センチ以上とも見られる大鎌。

それを斜めに背負ってこちらに向かっていた。

ちょっとお銃刀法違反でしょ…それは

優香は後ずさりながらも相手を伺う

一定の速度で近づくその男は、もちろん優香には全く身に覚えのない人物。

けど、だけど、やはりサングラス越しに視線を感じる…ような…
そして確実に、こっちに向かっている

やっぱりこれって逃げるべきなのかなあ

ぼうっと考えていると、いよいよ手の届く範囲まで迫っていて…

やばい!!

と、同時にきびすを返し一目散に駆け出した

チラッと後ろを確認するとやはりその男は優香の後を追って走り出す

ひいひいひいひい！！！！

優香は何がなんだかわからないといった思いと、それ以上に殺されるといった恐怖で頭が
いっぱいになった。

「ねえ…あれ」

駅付近に立ち並ぶビルとビルの狭間に、二人はいた。

20代半ばの男性とロングヘアの10代前半の少女。

男性の方は座り込みそこで転寝の最中…

普通ならそんなところで寝るなんて、非常識な行動も少女は慣れているようで

特に気にも留めていない様子。

それよりも別の異変に気づき男をゆする

「んあ？なんだよ」

だるそうに片目を開けると少女が無表情のまま指をさす

その方向に目をやると、キャーキャーと奇声を上げた女子高生が全速力でこっちに来る

その後には大鎌を背負った黒づくめの男

「お客さんじゃん」

男はニヤリと笑った

なに！！なんなの！！？

パニくる頭で漠然と浮かんだのは、最近ニュースで騒がれている連続暴行魔の事件

ちようどこの付近で起きていて、しかも犯人は捕まっていないという…

まさか…うそでしょおおおおおお！！！！

そのとき、すでに涙目の優香の腕がいきなり誰かにつかまれたと思っただとたん

その強い感覚にびっくりする間もなく、ビルの間に引っ張りこまれる

「キャッ… んんっ！！」

あまりのことに驚きの声を出す寸で、咄嗟に口に大きな手が覆った

「しっ！！」

腕を引き込まれそのまま背中から抱きすくめられた形になった優香は振り返ることもかなわず目だけで後ろの人物を確認する

そこには、大鎌男ほどではないが170後半の高めの身長と真っ黒な長髪の男がいた

そしてその隣に男と比べてだいぶ小さい小学生くらいの、赤茶の腰まで伸びた髪の少女が表情もなくなっている

っ たっ たっ たっ た…

まもなくして恐怖の一定の速度を保つ駆け足が、優香の身を隠しているビルの前を通過しようとしている。

やばい！！！！

優香は男の腕の中で目をつむり身を硬くする

ったったったったったったった……

足音は止まることなく優香の前を通り過ぎていった

た…助かった？？

目をそおつと開くと同時に、優香の身体を抱きしめていた腕が解かれる

改めて振り返ると、男は大げさにふうつとため息をついた

「間抜けなやつで助かったな」

男は笑っていうと、優香は緊張が解けたのかどつとその場にへたり込んでしまった

「おいおい、大丈夫かよ」

男は再び手を差し出す

「あ、ありがとうございます」

助けてくれたその手にごく自然に自分の手を重ねると、ぐんっと引っ張りあげられ

そのまま、たたせてくれた

命の恩人ともいうべき相手はさらさらの髪をなびかせ、細めの眉毛のおかげで

少しチンピラのような顔立ちをしている

うあ、超かつこいいー！

さっきまで命の危機が迫っていたのにもかかわらず、最近の女子高生は切り替えがすばらしく早い。

特に…こういったことには…しかし、

「に、してもさあ…なんでここにいるんだよ」

「へ？」

男の不可解な質問に、また頭が混乱する

「ここって、ここは通学路で…」

毎日当たり前のように通っていて、
おかしいのはあの大鎌の男のほうで…

「あ、そうか、お前って」

言いかけて男はさも、可笑しいかのように笑い出す

なんなんだ 一体

くつくつく、

と声を殺して笑う男になんだかついていけない

「あ、あの助けに来てありがとうございます。」

わたし、急がないと遅刻しちゃうので…では…!!」

と、男の行動を不審に思い

命の恩人様に適当にお礼をいってその場を立ち去った

男と少女はとくに追うでもなく優香の背中を見送った

2 不可解な朝

そもそもおかしかったのは、長髪の命の恩人よりも大鎌男よりもずっと前。

朝、目覚めてからがずっとおかしかった気がする。

鳴らない目覚まし時計

映らないテレビ

誰もいないリビング

シン…と静まり返った部屋で一人、目が覚めて

何かが変だ…と、感じながらもベッドから下りて優香はのろろと学校へいく仕度を始める

「おかあさん」

呼んでも返ってこない返事

誰もいない朝

今思うと、こんな朝は初めてだった

学校へ向かいながらも優香は次々と朝から今に至るまでの不自然な点を反芻してゆく

そういえば外へ出て、今日始めて見た人物があの大鎌男だったんじゃないか…。

なんでここにいるんだ？

ふと、あの長髪がいった言葉が出てきた

だってここは いつもの通学路…

じゃないの？

優香は何かひとつ、とても大切なことを忘れている気がして頭を抱える

ここはどこ…

わたしはまだ起きていないの？

これは 夢？

誰かにこの疑問を解いてほしくて あたりを見回す
人はおるか、車すら通っていない

コンビニに明かりはあるが人の気配はまるでない

まさか！？

優香はあわてて手当たり次第に近所の家のチャイムを鳴らす

ピンポーン ピンポーン ピンポーン

予想通り、何の返答もない

そつだ！！携帯！！

震える手で鞆を探り、携帯を取り出すとすぐさま画面を開く

「ええ！！何これ！！！」

携帯の画面は完全に初期化されており、過去に登録したサイト、友人のアドレス
待ちつけの画像までもが消えている

なによお…どおなってるの

カチカチカチと夢中でボタンを押して、あらゆる手段にでるが
電波すら圏外と表示されていて、もはや子供のおもちゃのように
使い物にはならなかった。

「誰か…誰かいませんかあ

誰かあ——————！！！」

誰か…といったところで長髪の男が頭に浮かぶ

そつだ！！あの人！！

あの人なら、何か知ってるかもしれない。

優香は身体を一転させると、数分前に別れた男の元へ向かった

3 孤独

「やあつと気づいたか…とろい女だなあ」

くつくつく…と、のどをならしながら男は優香の様子を眺めていた

「でも、記憶はまだ…」

少女もまた、男の隣で優香を観察している

「だな、じゃあヒントでも与えてみようかな」

風が吹くと男の長い髪がなびいていく

優香が探しているこの男は、すぐ近くのビルの屋上にいた

男の羽織ったシャツは風に乗って波をうつ

男は不敵に笑いながら、何も知らずに走り回る優香を見守った

優香の気力は限界を達していた

目標とする男は、やはり前いた場所にはいなかった

まだ遠くまで行っではいけないのではと、あちこち探してみたがそれらしい形跡ひとつ見つからなかった

「学校 行かなきゃ」

行ってもおそらく、誰もいないだろう

わかっていても、わかりたくない

あの校門をくぐれば生活指導の鬼川が仁王立ちしていて、生徒の服

装チエックに目を光らせ

その先の教室に入れば、友人の茜が笑顔で「おはよう」って…

昨日まで当たり前のように繰り返されていた風景

それが学校に行けばまた、みれる

ふらつく足取りで、優香は学校へ向かった

誰もいない校門

誰もいない教室

そして音楽室

コーラス部の優香は同じ部の茜と一緒に、放課後はほとんど音楽室にいた

二人で弾けないピアノのいすに座って話をしたり、鍵盤を適当に弾いたりするのが日課だった

優香はピアノのいすに座ると、そのまま顔を伏せる

こんなに静かな学校は初めてだった

当たり前が当たり前じゃなくなると…こんなに不安になるなんてね
不安…というより…

「寂しいよお…さみしいよお…あかねえ…

…おかあさあああん」

涙が止まらなくなって、顔を伏せたままその腕をぬらした

4 『優香』

どれくらいそうしていただろう…

顔を上げると、窓の外は薄暗くなっていた

優香は立ち上がると、ふらふらした足取りで玄関へ向かった

一階まで下りると

「今日、キツかったねえ」

…と、下駄箱から女の声が聞こえる

人！！？

優香は何時間ぶりに聞いた、人の声に驚いて声の元へ走ってゆく

見ると下駄箱で靴を履き替えている、二人の女生徒がいた

人だ！！？？

優香の目には涙がうかんでいた

優香は彼女らの真後ろまでくると、思わず抱きしめたい衝動をなんとか押さえ

女生徒の片方に手をかける

「あのー！！」

こっちに気づくことなく、上履きから靴に履き替えている二人に

接触しようとしたとき

スッ…

と、身体がすり抜けてしまった

「!？」

「コンクール近いからね、部長も気合はいつてるんだよ」

二人は優香の存在に、全く気づかずに会話を続ける

そんな…

すり抜けた腕を信じられない思いで確認した後、
下駄箱の真横に設置されてる大鏡に目をやると
鏡には二人の女生徒しか映っていなかった

「な…なんで…」

しかも、その女生徒二人には見覚えがあった

「茜!！」と

「わたしい!！」?

信じられない!!!こんなことって…

しかも、その会話の内容は覚えがあった

「でもさ、うちの部がまさか予選を突破しちゃうなんてね」

言いながら茜は下駄箱に上履きをしまうと扉を閉める

その手を見て『優香』は茜の手をぱつと取った

「茜指輪してるう、かわいいい」

「あ、昨日彼氏にもらったんだ」

「そっかあ昨日茜、誕生日だったもんね」

間違えない、この会話

昨日わたしが茜とした内容…

会話だけではなかった

帰る時間帯や二人のやりとりが、全く昨日と同じ
優香は昨日の『優香』と茜を目の前にしていた

5 真実

何か大切なことを忘れている気がする…

二人をみて、再びそんな気がしてきた
でも、それがなんなのか…どうしても思い出せない…

二人はそのまま歩き出した。部活が終わって家に帰るのだろう
優香は二人の後を追う。

その間、優香には嫌な予感もついてきた

この後、帰り道に何かがあった…何だったろう
何か、とても恐ろしいことが…

しばらく歩いていくと、一本道に入る

周りは畑になっていて、その奥には小さな林が広がっている
昼はのどかで癒される場所でもあるが、夜になると明かりは少なく
人通りもなくなるため、学校側でも出歩く際には一人は避けるよう
にと呼びかけている場所だ

そこまできると優香の悪い予感はますます大きくなっていった

ここで何かがあった…ここで…

優香は焦っていた。今思い出さなければ、大変なことが起きるよう
な気がして…

「ねえ、あの人…なんか変じゃない」

不意に『優香』が指差す先にはわずか30メートルくらい前に立っている男

男の手には、何か光るものを持っていた
息遣いも普通ではなく、肩を上下に激しく動かしているのはこちら側からでも伺える

その男をみた瞬間、優香の全身に震えが走った

「逃げて！！二人とも！！逃げてええええ」

優香の叫びとほぼ同時に男は二人の下に走ってくる

「キャーーーー！！！！！！！！！！」

二人は男の異常な行動に、危険信号を察知し叫びをあげる

『優香』はとつさに持っていた鞆を男に投げつけた

しかし、男は鞆を軽く腕でかわすと片手を振り上げた

男の手の先には、包丁が握られている

二人は無我夢中で逃げた

「あつ！！」

途中、バランスを崩して『優香』が転倒したとき

「優香！！」

それに気づいた茜が『優香』を起こそうと腕を握る

が、

その茜の後ろで包丁を振り上げている男がみえた

「危ない!!」

とっさに『優香』が茜を突き飛ばすと、勢いのとまらない男の刃物がそのまま『優香』の胸に

キャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!

優香は悲痛な叫びをあげるとともに全ての記憶が蘇った

6 孤独な地獄

「思い出した？」

あまりのショックな出来事に、その場に座り込んでしまった優香の後ろから

少女の声がした

赤茶の腰まで伸びた髪が印象的な少女

優香は少女の声に背を向けたまま尋ねる

「わたし…死んだの？」

「…ええ。連続暴行魔に殺された」

連続暴行魔…この付近でおきていたという…

その被害者がわたしだっていうの！？

それまでの情景は、テレビの画面が消されたようにプツツと暗くなる

「あなたは？」

確か、朝会った長髪の男のそばにいた…

「わたしはあなたと同じ、この地獄の住人」

「地…獄！？」

思いもよらなかった言葉に振り返ると

「そう、ここはただの広い空間に自分しか存在しない孤独を永遠に味わう地獄

孤独地獄」

そこには、例の長髪の男もいた

「わたし、地獄に落ちたの!!?」

酷く心外な気分だった

普通に生きていたら、何度かうそはつくし悪いことだってしてしまうけれど、刑務所だつて入ったことのない優香にしてみればまして地獄だなんて…

「ま、落ちたというより迷い込んだというほうが妥当か？
たまにいるんだよなあこういう間抜けなお客さんが」

くつくつくと男はいかにも楽しそうに笑う

「だったら、ここから出してよ」

そんな男の態度が癪に障って強く出る

「迷い込んだのなら、罰を受ける必要もないはずでしょ!!」

「まあな。でも、お前がせっかくここから出られるチャンスをふいにしたんだぜ」

「チャンス？」

見に覚えのない言葉にきょとんとすると男はあごで優香の肩を指す

「死神様のお迎えから逃げたのはお前だろ」

ハッとして男の指す方向に目をやると

いつの間にか、全身黒づくめの大鎌男が立っていた
何も知らずに登校しようとしたところをいきなり追いかけてきた男…

この男が死神？

「よっ、久しぶり」

男は死神らしき男に親しげに挨拶をしたが、

「やっぱりお前の仕業か…」

死神は挨拶を無視して続ける

「あの時、彼女をかくまったのはお前だろう。お前の邪魔のおかげで制限時間を越えてしまった」

「せ…制限時間って？」

しばらく、二人のやり取りを呆然と聞いていた優香だが
制限時間という台詞に嫌な予感がした

「成仏できる時間帯。」

あんたは、地獄にすぎたからな。タイムオーバーだ」

長髪男は相変わらず楽しそうに告げる

「そ…そんな、じゃあずっとここにいなきゃいけないってゆっの…」

冗談じゃない！！この数時間だけでも充分につらかった

誰もいない世界で、何をしろというのだ

泣いてもわめいても、そんな自分を見る人すらいない

自分以外に意思を持つ者はなく

感情があるぶんだけ、やりようもない思いを抱えてしまうことが

どんなにきついか、たったの数時間で痛いほど思い知らされた

それが、永遠に続くなんて…

そんな絶望に震える優香の肩に死神はポンっと手を乗せると

「でも、お前しだいできるとかできないんじゃないのか。閻魔」

と、長髪男を前に切り出した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2840e/>

DRINK IT DOWN

2010年10月10日03時21分発行